

「まことに、わたしの民は無知だ。わたしを知ろうとせず、愚かな子らで、分別がない。悪を行うことにさとく、善を行うことを知らない(エレミヤ 4:22)」。

神の民は無知で愚か。この嘆きが六百年後の十字架と共振し、現代のキリスト者とも響き合う。預言は、十字架にかけられている覆いを取り除く。

総督ピラトはローマの帝国官僚として汚点にならぬよう、イエスの処刑に難色を示した(マタイ 27:23)。しかし昂奮した「群衆はますます激しく〔十字架につける〕と叫び続けた(27:23)」。

預言者が言うように「神の民は無知、神の子らは愚かで分別がない」。妻の進言もあってか(27:19)、ピラトは不当な処刑の共犯にならぬよう群衆の前で手を洗い、「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ(27:24)」と突き放した。

ここにはイエスの様子を伝える記述はないが、沈黙するイエスがいわば見えない軸となり、狂気の群衆と冷静な総督を巡らせている。二者のコントラストは興味深い。

「十字架につける、十字架につける(27:22~23)」。群衆の呪わしい絶叫が耳にわんわん鳴っている。預言者が嘆くように、神の民はつくづくバカヤローだ。

妄想による小さなバカヤロー騒動は、私たちの周囲で日常的に起こっている。また、かつて私が訪問した千石さんの「イエスの方舟」事件は、マスコミが煽り立てた大きなバカヤロー妄想だった。ホロコーストや関東大震災時の朝鮮人虐殺(庶民の手による)ほどの群衆妄想になると、「バカヤロー」とカタカナで書けないほどに、おぞましい。

妄想に煽られた群衆が「十字架につける」と叫ぶ中、「神の民」ではない総督は妙に冷静。「(イエスが)どんな悪事を働いたというのか(27:23)」とピラトが拒絶気味に感じると、群衆の「十字架につける」は益々大きくなる(27:23)。すると「ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て(27:24)」、大仰に手を洗って自分は無関係、お前らの問題だ(2:24)、と宣言した。

「民はこぞって答えた。〔その血の責任は、我々と子孫にある〕(27:25)」。おいおい、昂奮してそこまで言うのかい。

「まことに、わたしの民は無知だ。わたしを知ろうとせず、愚かな子らで、分別がない(エレミヤ 4:22)」。それにしても、こんな無知で愚かで分別がないバカヤローが、どうして神の民なのか。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっているが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされる(ロマ 3:23~24)」。なんというキリストによる贖いの業、神の恵みの底知れなさか。

「罪を犯して栄光を受けられない」私たちを、「悪を行うことにさとく、善を行うことを知らない(エレミヤ 4:22)」神の民を、イエスは己が命をもって贖い、無償で義とし給う。

「この人の血について、わたしには責任がない(マタイ 27:24)」と「十字架の血」を拒絶した総督は救われるのか。彼にとって十字架やキリストとの接点は、ない。手まで洗って関係を断ったのだから。

十字架は「その血の責任は、我々と子孫にある(マタイ 27:25)」と応じた「無知で愚かな民(エレミヤ 4:22)」のためにある。

神の子の「贖いの業」はピラトにとって単に一人の男が死んだだけのこと。義は自分にあるとして疑わない者こそ最大の不信仰者。だが私たちはバカヤローの子孫(27:25)、でよかった。



#### 《おまけのひとこと》

十字架は 赤土のようにねっとりした愚かさ(マタイ 27:18)に建てられている 有機物でふっくらした賢い沃地に建てるとうやがて倒れてしまう 無知や妬み(マタイ 27:18)で瘦せた赤土が十字架を保持し 伝えて来た